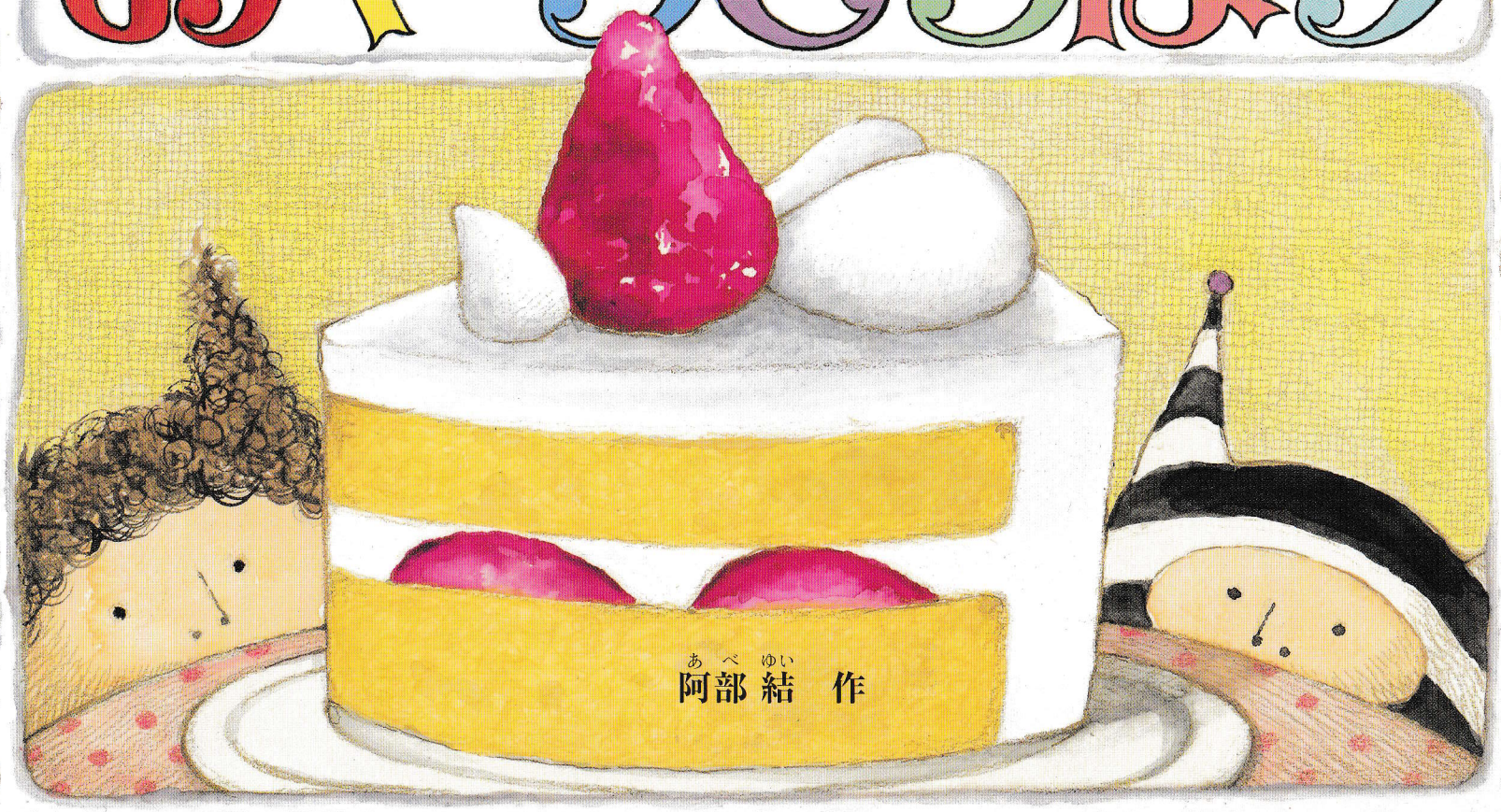
8
こどものとも
二〇二一年八月一日発行　毎月一回一日発行　通巻七八五号　一九九一年四月六日第三種郵便物認可

おやつどろぼう



阿部結（あべゆい）　作

絵本のことば 言葉のえほん

稲葉俊郎さん
『はぐ』

はぐ

佐々木マキさんの『はぐ』という絵本がある。出会い、「はぐ」し、抱き合う、というシンプルな絵本だ。人だけではなく、動物や魚とも出会い、「はぐ」する。子どもとこの絵本を読んでいた時、「はっぐー」と声に出して「はぐ」しながら読み合った。それ以降、わたしが仕事に行くとき、子どもと「はっぐー」と言いながら「はぐ」しあうのが重要な儀式となった。時に「はぐ」しない日もあるが、ふと思い出したように「はぐ」しあう。我が家では、「はぐ」は出会いの時ではなく、しばしの別れの時の重要な合言葉になった。

子どもは、言葉の意味や概念を理解する前に、「声」そのものを受け取っている。ちょっとした「声」の中にも、声の高さや低さや強さや弱さ、テンポやリズムやトーン、その他のあらゆる多様なものがひとまとまりに含まれている。概念や意味を介して言葉を受け取っているのは大人の世界の特徴で、こどもはもっとシンプルに声という実態そのものでダイレクトに大人の気持ちを受け取っている。子どもが絵本を楽しんでいる時にも、絵のイメージ世界の楽しさに加え、声に出して読んだ時の「声」そのものの魅力を楽しんでいるだろう。子どもが絵本を読みながら出している自分の「声」だけではなく、大人が絵本を読み聞かせているときの大人の心や体を通過した「声」もそうだ。だからこそ、大人は自分の「声」に対してもっと責任を持つ必要がある。

「はぐ」という言葉を「は！　ぐ！」「はっぐー」「はぁあぐぅう〜」などと、書き言葉では表現できない自由さで「声」の助けを借りて表現している時、ニャー、ワオーン、コケコッコーのようなオノマトペのようなものとして、子どもは体全体で、心全体で受け取っているのだろうと思う。そうでなければ、絵本をワクワク、ハラハラ、ドキドキ読んでいるときの感情をうまく表現できないからだ。子どもは、心が動いたときには、実際に体も動くし、体の動きの一環で声も飛び出てくる。そうして「声」は潤滑油のような効果を果たしながら、絵本の冒険を手助けしているだろう。

自分は医師として臨床現場にたっているとき、相手の言葉の内容よりも、声そのものをダイレクトに受け取るようにした方が、相手の体調がよく分かる。なぜなら、言葉は嘘をつけるが、「声」には嘘がないからだ。わたしたちの体は、ムカムカ、シクシク、イガイガ、ギュルギュルとしか言えない表現に満ちているので、体の訴えを言葉の概念として受け取るよりも、声や音、オノマトペのような擬音語や擬態語として受け取る方が、生命の実相により肉薄できる。

そもそも、3歳のわたしの子どもは、いつまで父親と「はぐ」してくれるのだろうか。せめて自分が死ぬ瞬間には、妻や子どもにギュッと「はぐ」してもらいたい。出会いと別れを、シンプルに分かり合い、分かち合うためにも。

稲葉俊郎（いなば としろう）
1979年熊本生まれ。医師、医学博士、東京大学医学部付属病院循環器内科助教を経て、2021年現在、軽井沢病院副院長・総合診療科医長、信州大学社会基盤研究所特任准教授、東北芸術工科大学客員教授などを兼任（山形ビエンナーレ2020 芸術監督）。著書に『いのちを呼びさますもの』（2018年）『いのちは　のちの　いのちへ』（2020年、ともにアノニマ・スタジオ）『ころころするからだ』（2018年、春秋社）『からだとこころの健康学』（2019年、NHK出版）など。HP：https://www.toshiroinaba.com

『はぐ』
佐々木マキ 文・絵
福音館書店

題字／おーなり由子